

【海外留学レポート】

デンマーク留学を通して得た成長

—限られた時間での挑戦—

Self-growth in Denmark: The Challenge in Limited Time

東北大学工学研究科 高橋 佳亮

TAKAHASHI Keisuke

(Graduate School of Engineering, Tohoku University)

キーワード：交換留学、理系院生の留学、サマープログラム、TESP

1 はじめに

修士一年の夏から約5か月間、デンマークのリュンビューという町にあるデンマーク工科大学（DTU）に交換留学に行った。DTUは東北大学工学部・工学研究科の部局間学術交流協定校であり、派遣交換留学制度を利用した。本レポートでは主に、留学を決意した背景、本留学での多様な経験と出会い、およびその経験から得た自己成長について報告したいと思う。私一人のたった約5か月の限定的な経験ではあるが、海外経験がほぼ皆無だった理系学生がなぜ留学を決め、そこから何を学んで、今後の人生にどのように活かしていきたいのか伝えることで、今後留学を少しでも考えている方々の判断材料の一つになることを願う。

2 背景

2.1 留学を決めた理由

最初に留学を決意した理由を簡単に述べたい。それは「死ぬまで新しいことに挑戦し続けたい」という想いの体現と「国籍や国境に関係なくリーダーシップを発揮できる人材として生きていきたい」という非常に抽象的な人生の目標のために大きな意義のある経験を出来ると判断をしたからである。留学を通して得られると仮定した、①海外で長期間住むという経験②他国籍の人との交流を通して身に付き得るコミュニケーションスキル③日本と全く異なる文化に入りこむ経験④母国語以外で高度な教育を受ける経験⑤日本人が少なく自分を追い込める環境、これらが上記の想いの実現や目標への前進に向けて必要であると考えた。

2. 2 上記の想いと目標を抱いた理由

「死ぬまで新しいことにチャレンジし続けたい」という想いについては、高校入学直前に東日本大震災で被災した経験が核になる。仙台市で被災した私は複数の大切なものを失い、「生かされたからには生きているからこそできることに全力で挑戦し続けなくてはならない」という想いを強く持った。極限状態で得たこの想いはどんな大人になっても忘れてはいけないと思うので行動指針の一つにしている。次に「国籍や国境に関係なくリーダーシップを発揮できる人材として生きていきたい」という夢は中高大に所属していたサッカーチームでの主将経験が核になる。リーダーとしての難しさやその先にある大きな達成感を体験し、卒業後もリーダーシップを追求していくことを人生の指針として仮決めした。そして、死ぬまでにどこまでリーダーとしてスケールアップできるかを今後の人生の一つのテーマにすることに決めたため、上記の目標を掲げた。その上で世界にはどのような同世代の人がいて、現時点で自分と世界にどれ程の距離感があるかを知りたくなった。

2. 3 留学決断への悩みとそれに対するアプローチ

上記の理由により留学を決断したが、その過程で理系院生での留学ならではの悩みも生じた。それは修士における二年間の中の約半年間もの間を研究から遠ざかることに対する不安である。修士課程に進んだ以上、研究に全力で向き合い結果を残すのが第一であるという考えがあったためこのような不安を抱いた。しかしその不安を解消すべく「留学中は留学先のことにのみ集中する」ではなく、「留学中にも留学先のことにのみならず、研究に関してできることをする」という様に考え方を改めて自分を納得させた。留学前と留学中のどちらの期間でも、時間の使い方で穴埋めが可能であると考えたからである。本留学記の本題では無いためその具体的なアプローチには触れないが、二年間研究に没頭している人の研究への努力値や経験の尊さには及ばないが自分のベストを尽くすことが出来ていると考えている。

また留学前の英語力についても触れたいと思う。当時の英語力は悲惨だった。学内選考の面接では、質問に一切返答できず帰り道で強い悔しさを覚えた。先生のご厚意により留学許可を頂くことはできたが、このまま留学に行っても何も身に着けられないと焦りを感じて毎日の英語の勉強に精を出した。努力の甲斐あり、徐々に英語力は向上したもののスピーキングは中々国内で伸ばすことが出来ないまま留学に突入した。

3 留學生生活

3. 1 留学先の大学

デンマーク工科大学（DTU）は世界中から多くの理系学生を交換留学や正規留学生として受け入れている工科大学である。多くの優秀な理系学生に囲まれる環境かつ、ネイティブに近い英語水準を

持つことで知られる北欧にも関わらず受入に明確な語学スコアを設けない大学であることもあり留学先に選んだ。DTUはデンマークの首都コペンハーゲンから電車で30分ほど離れたリュンビューという町にメインキャンパスを置いており、キャンパスが二次元座標のように第一象限から第四象限に分かれている理系大学らしい面白いキャンパスだった。リュンビューは小さいが、非常に美しい自然に囲まれて雰囲気の良い町であり、勉強に行き詰りを感じた時や天気がいい日などに、散歩しながら考え事をしたり友達と遊んだりしたのは思い出の一つである。

3. 2 留学先での授業と学び

DTUの授業は1授業当たり4時間で、東北大学の授業時間の倍以上という形式だった。また授業時間以外にも、授業の中心になるのがグループワークである点も東北大学との違いであった。私は、東北大学では応用化学専攻に所属し応用化学分野の研究をしているが、DTUでは化学とは直接関連のないエネルギーや金融工学などの科目を履修した。これは既知で理解が容易い内容を英語で学ぶのみでは勿体ないと考えたこと、そして大学院修了に必要な単位はほぼ留学前に取得したため留学後の単位互換の必要が無かったことからである。そして化学を学んできた中で興味を持つようになったエネルギー工学や、就職後のキャリアに役立つ金融工学など、東北大学では履修が難しい分野を学びたいと思った。これらの履修した授業において多くの挫折と学びを経験することが出来た。その中でも2つの授業の具体的なエピソードと学びを以下に示す。

◆金融工学

この授業ではプログラミングでの処理能力や金融の知識などの能力面を身に付けることができたが、それ以上にグループワークを通して学ぶことが多かった。最も感銘を受けたのはワークを通してチームとして成長する姿勢である。セメスター後半から、レポート課題を3人一組のグループで取り組むことになったが、私のグループのメンバーのレベル感ばらばらであり得意不得意分野をそれぞれ持ち合わせている状態（私の場合は授業内容自体の理解は問題ないが、アウトプットのためのプログラミングスキルが不足しているなど）でのスタートだった。そこで得意分野をベースに最終レポートを分割したのだが、その後の姿勢に違いを感じた。それは単に自分のタスクを終わらせるのみならず、他のメンバーを高め、他のメンバーから自分も学んで全員で成長していく姿勢を持っていたことである。例えば、あるメンバーは自分のタスクに進捗があるたびに必ずそこからの学びを他のメンバーに共有することや、他のメンバーの進捗がある場合には疑問点について理解するまで質問を繰り返すなどの姿勢を貫いていた。このような姿勢は学生集団のみならず、チームで何かを成し遂げる場合に必要であると思うが、それを授業という場を利用して実践していく姿に刺激を受けた。

◆産業エコノミー

この授業ではエクスカージョンで工業団地の規模感や、座学やワークを通して工業団地におけるシ

ナジーの大切さなど多くのことを学ぶことが出来た。その中でも最も印象に残っているのは、グループワークにおける、あるメンバーのリーダーシップである。セメスターを通して3人一組でのワークを行ったが、私以外の残りの二人は環境工学専攻の学生であるため背景知識が豊富かつ英語力がネイティブ並みであったこともあり、私は引け目を感じてしまった。特に最初の授業ではほとんど発言することが出来ずに悲しい思いをした苦い記憶もある。しかし、あるメンバーがその後の授業から徐々にグループのリードの仕方を変えたように感じた。具体的には、授業内外のコミュニケーション方法の変化、方針や決定事項などの確認回数の増加、そして授業外SNS上での意見交換の増加などである。これは恐らく委縮していた私の様子を見て、グループの関係性構築や授業内容の理解度のチェック、そして「多様な人がいるチーム」として成果を出すために必要だと彼が判断したからだったのだと思う。とても悔しいが、単位を取るだけであれば足手まといの私を無視することも可能だったと思う。しかし授業を単なる卒業要件としてみなすのではなく、その環境で真剣に何かを得ようとする姿勢を強く感じた。私の想像の域を超えないが、今回の場合は今まで関わって来なかった英語も背景知識も劣るチームメイトを巻き込んで結果を出すことをテーマの一つにしていたのだと考えている。実際に行ったチームの巻き込み方や授業に対する姿勢などはもちろんだが、臨機応変にチームに影響を与えていく姿に心から尊敬の念を抱くと同時に私自身の当面の目標像が定まった。環境に応じて日本でもこのように目標になるような人との出会いはあるかもしれないが、少なくとも私の場合、留学を選ばなかった場合には得難い機会であり、留学に行って良かったと強く思えた出会いだったことは確かである。

これらの授業内に限ったことではないが、能動的に何かを得ようという強い意志を持つ人が多かった。座学メインの東北大の講義とグループワークメインのDTUの講義を比較して良し悪しを判断することはできないが、このように授業からですら必死に何かを得ようとする意欲的な学生が常である環境が世界にはあることをリアルに知ることは意義のあることだと個人的には思う。

3. 3 留学中の課外活動

授業に関する時間以外は課外活動にも参加した。一つ目は「日本語カフェ」という名の日本文化コミュニティへの参加である。他大学の学生が主な参加者だったが、日本人のみならずデンマーク人や中国人など非常に国際色の強い環境だった。日本から遠く離れた土地でも日本を愛する人が集まっているという事実に感動を覚えた。また、日本人よりも日本文化に通じている人がいたこともあり、さらに日本人として自覚と誇りを持ちたいと思い始める良いきっかけでもあった。途中からあまり参加できず残念だったが、その限られた中でも数々の思い出と刺激を与えてくれた。

二つ目はサッカーサークルへの参加である。サークルを選ぶ上で、私は小学校から大学までしていたサッカーを選んだ。加入当初は知人がいないサークルに不安を覚えたが、いざサッカーを始めてみ

るとすぐに友人が出来た。この経験から学んだことは二つある。一つ目は、親密になるためには言語がすべてではないこと、そして二つ目は、自分の強みを持っていると国際色の強い集団であっても認めて貰えるということである。どちらも帰国後の今、文字として受け取るとごく当たり前のことであるように感じるが、その原体験を得たことは今後の人生にとって大きな意義を持つと思っている。

4 留学後の生活と今後について

5か月程度の留学であったが、自分にとって短くも長くも感じるような不思議な体感時間であった。その中で経験したことや思い出を思い返して、楽しかった時間と困難を感じていた時間どちらが長かったのかは正直なところ分からない。授業を思い返すと焦りながら死に物狂いで食らいつこうとしていた辛い記憶が強いが、その一方、友人との日常生活や旅行に行ったことなどの楽しい記憶も多い。ただ帰国してみて冷静に思い返してみると、そのどちらの時間からも圧倒的な達成感や充実感というものを得ており、確かに帰国後の自分の中に強く残っている。身についた英語力やコミュニケーションスキル、辛い授業でも全単位を取り切った経験など具体的な結果や成長はもちろん私の非常に大きな財産であり誇りに感じている。しかし、その過程で自分自身と真剣に向き合い、自分自身の意思で毎日真剣に生きて努力を続けたことにもまた格別の意義があったと感じている。帰国後も日々の生活や研究等で困難を感じることは多々あるが、留学中の自分自身やその後にかけていた達成感や充実感を思い出すことで乗り越えることが出来ている。そしてそれは社会人として大きな困難に挑む際の駆動力になるに違いないと思う。

最初に述べた通り、私は「国籍や国境に関係なくリーダーシップを発揮できる人材として生きていきたい」という目標を掲げているので最後にこの目標について述べたい。留学や就活を終えた今、この目標を今後も追及し続けたいという思いの強まりを感じている。国際色豊かな環境でリーダーシップを取れなかった悔しさ、その環境でも心折れず最後まで協力してやり抜くことで得た大きな達成感や成功体験、そして当面の目標像が出来た今だからこそ、もっと自分自身を高めていきたいという欲が強くなっている。また、リーダーシップを発揮できる「日本人」として生きていきたいという想いも生じている。留学を通して出会う人達に自分はまず「日本人」として認識されること、そして日本が基本的に好印象を持たれやすい国であるということを感じた。そんな中、日本人代表として世界を巻き込み挑戦し続ける人間になりたいという気持ちが芽生えてきた。

明確な達成基準が無く果ての無い抽象的な目標ではあるし、現代のような変化の速い社会で私が具体的にどのような過程で成長していくかは不明である。しかしせっかく留学を含むこれまでの学生生活を通して見つけた目標なので、私自身の生き方の大枠として定義することにした。その中で世界にアンテナを張りながら、世界中の多様な人との出会いや学びから刺激を受けて卒業後も成長していきたい。

5 おわりに

留学後に研究室の同期や後輩と会い、それぞれが異なる成長を遂げて非常に頼もしくなっている姿を見てみると、留学に行かなかった場合でも日本もしくは東北大の私の研究室は大きな成長が可能な環境であること改めて感じた。しかし、研究室の半年間と異なる角度ではあるが、自分なりに全力で過ごした留学において得た多くの成長と経験に大きな誇りを持っている。

このような貴重な留学の機会を与えてくださった東北大学関係者の皆様、多くの支援をしてくださった日本学生支援機構の皆様方、そして精神的に支えてくれた友人や家族に感謝を申し上げ、今後も自身が掲げる「国籍や国境に関係なくリーダーシップを発揮できる『日本人』」として日本に貢献し続けたい。



写真① 香港人の友人との日々の筋トレ光景。彼とはコペンハーゲン探索やお互いの国の話をしたたくさん思い出がある。



写真② フランス人の友人との写真。デンマークでの思い出の多くは彼との思い出である。